# 編集後記

あけましておめでとうございます。1月号は例年、恒例の干支随筆が楽しみです。今回も楽しく読ませて頂きました。48歳､60歳､72歳‥とそれぞれの年代で思うところがあるでしょう。一度立ち止まってこれまでの軌跡を振り返るには「干支随筆」は格好の場所と思います。

60歳、還暦：人生の折り返しでの友愛の玉城正弘先生は幼少期を過ごしたブラジルの記憶を頼りに、ポルトガル語の勉強を再開するという。同じく友愛の比嘉盛丈先生。せっかくヒトとして生を受けたので、診療のみならず平和や政治・経済にも関心が出てきたという。田名毅会長は楽しかった高校時代の様子に興じて、思わず笑みがこぼれていそうな顔が目に浮かぶ。

更に、1周り年配の72歳。2022年に常勤での仕事を辞めた久田友治先生。「働きすぎで、人は死ぬ直前に後悔する」との言説に触れたからだという。一方でまだ現役で頑張る當山護先生､宮里章先生｡宮里先生は還暦から始めたロードバイクと水泳は今も続けている。孫を生きがいにこれからも長く現役を続けるという。人生は三者三様、百人百様である。後悔のない生き方を選択して欲しい。

閑話休題。掲載された顔写真は近況のもの、それ以前かもしれません。想像を働かせるのは止めて、高齢者イメージの変遷を紹介したい。

漫画サザエさんに登場する磯野波平さん1895年生まれの当時54歳。確かに定年前でマスオさんと一緒に通勤していた。1947年生まれの課長・島耕作さんも当時54歳の設定。福山雅治氏も1969年生まれの55歳。容姿は驚くほど大きな差がある。3人を比べても戦後すぐと今では時代とともに50歳代のイメージが大きく異なることがわかる。

高齢者の定義は見直される必要がある。九大の二宮先生、東大の笠島先生の論文からは高齢者の知的レベルが年々向上し、実は認知症の予測値が年々急速に低下しているという。認知症はそれほど多くならないらしい。論文からは医療・福祉の施設を過剰に誘導する施策に危惧を抱いている。

丁度1年前の元日。能登半島地震が発生した。追い打ちを駆けるように9月の豪雨災害。今でも避難生活をおくる人々がいる。昨年(2024年)の世相を表す漢字は「金」だというが、能登の人々にはパリの金メダルを素直に喜べない人もいると思う。次点の「災」を思い浮かべる人も多いはずである。我々は何ができるか黙考する。今年は巳年。「回復と再生」に期待したい。

広報委員　久貝　忠男